

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	記紀の天地創造 : 「天地初発之時」の解釈をめぐって
Author(s)	松井, 富美男
Citation	HABITUS , 21 : 59 - 72
Issue Date	2017-03-23
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/42917">10.15027/42917</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042917">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042917</a>
Right	
Relation	



# 記紀の天地創造

## －「天地初発之時」の解釈をめぐる－

松 井 富美男

(広島大学教授)

### 1. はじめに

かつて死後の世界は「黄泉の国」とか「根の国」とか呼ばれた。記紀には亡妻イザナミノミコトに会いに行ったイザナギノミコトが、その世界が穢いことを知り、急ぎ逃げ帰って禊をする物語がある。この物語から古代日本人にとって死後の世界がいかに忌まわしい世界であったかが見て取れる。そこで現代人は、古代人が現実主義者であって、死に関して淡白であったと思い込む。果たしてそうであろうか。現代人は身近な人の死に接して哀悼の意を表明し、その亡骸を丁重に葬る。それが人情というものであろう。古代日本人もそうした感情を少なからず持ち合わせていた。このように今もなお日本人の深層に潜む思想とは何であろうか。そのことを検討するために、本稿では記の本文冒頭の「天地初発之時」という語句に焦点を当てて、聖書神話とも比較しながら、その意味を解き明かす。

### 2. 聖書の天地創造

周知のように『聖書』は、「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。」(創1:1)という件から始まる。この場合「はじめ」とは、作者が語り始めるときを指すのか、それとも神の御業の開始をいうのか。ちなみにヨハネ福音書も「初

## 記紀の天地創造

めに言があった」という書き出しから始まる。ここではまず「言」が暗示され、直後にこれが「神」であることが明らかされる。これを見るかぎり、創世記よりもヨハネ伝のほうがより根源的なことを伝えていることが分かる。なぜなら神の御業が可能であるためには、少なくとも前もって神が存在しなければならぬからである。そう考えると創世記でも「はじめ」の前に、神が存在していたのかもしれない。だがこの憶測が妥当でない可能性もある。なぜなら神は創造以前に存在したのではなく、創造と共に現れたとも考えられるからだ。もしも創造以前に神が存在したのであれば、神はそれまで無為に過ごしていたのか、それとも単に考えていたのかもしれない。しかし神は人間のように思考に時間を要しないだろうから、神的直観によって瞬時に思考から創造に転じた可能性もある。つまり考えること自体が神の御業でもあるのだ。そう考えれば、創造の前に神の存在を想定しなくてすむ。神はまさしく「言」であり「御業」でもあるからだ。

しかし、このような形而上学的な論議よりも重要なことは、ここで神が創造主体であることが明記されていることである。神はまさに万物の創造主である。あらゆる存在者は神に由来し、神に拠らないものは何一つとしてない。天地も同様である。日本神話では天地分離後に、あるいは天地と共に神が現れ、天地以前にはカオスがあったとされるが、聖書では神が地とともに天も創造したかのように書かれている。だとすれば「はじめ」以前に神はすでに存在したのであろうか。字面だけを捉えれば、こうした疑問も湧いてくる。だが物語上の時間は歴史的な時間と一致する必要はないのである。いかなる物語も「はじめ」から始まり、「はじめ」以前に物語は存在しない。だから物語以前の神や天地を想像しても意味はない。ここで押さえるべきことは、神が万物を「つくる」ということ、その一点である。

では神が「つくった」ものとは何か。第一日目は神の「光あれ」という言葉

とともに、神の霊や闇に覆われていた地に光が射し、昼夜の区別が生じて、夕となり朝になったとある。日のはじまりである。二日目には水の中から大空ができ、水は天の上下に二分する。ここで天の上の水が何を意味しているのかわからないが、これはノアの洪水とも関連する。うっかりすると見落としてしまうが、洪水の原因は「天の窓が開けて」（創7:12）四十日四十夜降り続いた雨である。この雨は「天の窓」が裂けて流出した水、つまり天の上の水である。三日目以降は次のとおり。三日目に天の下の水が海と陸に分かれて、陸に植物が生え、四日目に太陽と月と星辰ができ、五日目に魚と鳥が造られ、六日目にまず獣と家畜が造られ、その後人が造られた。では神が人間を造った目的は何か。「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うもの<sup>を</sup>を治めさせよう」（創1:26）とあるから、人間は尊厳さの根拠を与えられるとともに、地上の全生命の管財人としての使命を負わされる。

このように聖書の神は、「つくる」ものであって、「つくられる」ものでも「なる」ものでもない。ここに永遠なる神の栄光が存することになる。では日本神話の場合はどうか。

### 3. 「天地初発之時」の読み方

便宜上原文のままですと、『古事記』の本文は、「天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隠身也。」<sup>1)</sup>という件から始まる。そこですぐさま問題となるのは、「天地初発之時」という部分である。これを岩波版に従って「天地の初めて発<sup>ひら</sup>けし時」と読めば、天地が分かれる瞬間が存在し、天すなわち高天原の生成後にアメノミナカヌシの神、タカミムスヒの神、カムムスヒの神の順に三神が生成したことになる。「発」はもともと両足を開いた状態を象った文字なので<sup>2)</sup>、これを「初

から切り離して単独で「ひらく」と読めば、その字義を活かすことになる。だがこのように読む場合、逆にそれ以前の天地未分がどういう状態なのかも気になる。そこで「天地初発之時」をどう読むかが重要になってくるが、この読み方を知る手掛かりが『古事記』にはない。

ちなみに、「天地初発之時」の読み方は、アメツチノハジメノトキ、アメツチノハジメテオコリシトキ、アメツチノハジメテヒラクトキなど色々である。では宣長はこれをどう読んだのであろうか。彼は『古事記伝』で次のように述べている。「天地初発之時は波自米能登伎と訓ムべし。万葉二〔二十七丁〕に、アメツチノハジメノトキ天地之初時之云々、十〔三十二丁〕に、アメツチノハジメノトキ乾坤之初時從云々、書紀孝徳ノ御卷に、ヨリ アメツチ ハジメ與天地初云々などがある、これら天地乃波自米と云る古言のヨリドコロ拠なり。此に発ノ字を連ねて書るも、たゞ初の意なり。〔字書に発は起也と注せり。〕事の初を起りとも云々、又俗に初発ノ字を連ねて書るも、たゞ初の意なり。此ノ二字を用ひなれたるより出たるなるべし。〔初発をハジメテヒラクルと訓るはひがことなり。其はいはゆる開闢の意に思ひ混へつる物ぞ。抑天地のひらくと云フは、カラフミゴト漢籍言にして、此間コの古言に非ず。上ツ代にはト戸などをこそひらくとはいへ、ソノホカ其余は花などもさくとのみ云て、上ツ代にはひらくとは云ハざるき。されば万葉の歌などにも、天地のわかれし時とよめるはあれども、ひらけし時とよめるは、一つも無きをや。〕さて如此天地之初発と云へるは、たゞ先づ此ノ世〔ホトケヰ伝書に世界と云て、ヨノヒト俗人も常に然いふなり。〕の初を、おほかたに云るコトバ文にして、此處は必しも天と地との成れるを指て云るには非ず。〕<sup>3)</sup>

この個所だけからでも、宣長解釈の真骨頂が伺える。ここで注意しておくべきことは、宣長が「初発」を「はじめてひらく」と読むのは誤りであって、二字を一緒にして「はじめて」と読むべきだとしている点である。先にも述べたように、「発」は両足を開いた状態を象った文字なので「ひらく」と読むほうが字義に適っているように見える。しかし宣長はこの読み方に異議を唱え、「発」

を「初」と同義とみて、「発」に独立した意味を持たせない。確かに「発」を「ひらく」と読む場合には、「開いた戸」に対する「閉じた戸」のように「ひらかない」状態、つまり天地創造に先立つカオス状態が想起される。しかし宣長は、これは「漢籍言」による悪影響であって、古代日本人の「古言」に従えば「はじめて」と読むべきだという。加えて、この後に続く「次に故日開闢之時、<sup>オレイハクアメツチノハジメトキ</sup>クニツタダヨヒテ <sup>ウヲノミズニウカベルガトクナリキ</sup>ウヲノミズニウカベルガトクナリキ、<sup>マコト</sup>譬猶游魚之浮水上也云々」という個所が「<sup>ツタヘゴト</sup>実の上ツ代の伝説」<sup>4)</sup>であって、これ以前の個所は「たゞかざりに加へた」<sup>5)</sup>ものだともいう。

この読み方は妥当であろうか。それを検討するために、『古事記』からいったん離れて『日本書紀』に目を転じてみよう。紀では天地開闢の記述の仕方が記と異なり、「古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、<sup>まるか</sup>渾沌れたること<sup>とりのこ</sup>鶏子の如くして、<sup>ほのか</sup>溟滓にして<sup>きざし</sup>牙を含めり。其れ<sup>すみあきらか</sup>清陽なるものは、<sup>たなび</sup>薄靡きて天と為り、<sup>おもくにご</sup>重濁れるものは、<sup>つつ</sup>淹滞みて地と為るに及びて、<sup>くはしくたへ</sup>精妙なるが<sup>あ</sup>合へるは<sup>むらが</sup>搏り易く、<sup>かたま</sup>重濁れるが凝りたるは<sup>かれ</sup>竭り難し。故、天先づ成りて地後に定る。然して後に、<sup>かみ</sup>神聖、其の中に<sup>あ</sup>生れます。」<sup>6)</sup>とある。このように紀ではカオスが天地の分化や陰陽の区別に先行する。この状態は鶏卵のように柔かくても分化や対立の兆しをすでに含む。やがてこの曖昧模糊としたカオスから清澄な部分がいち早く上昇して天となり、重く濁った部分がゆっくりと固まって地となり、地の中から神が生じたとされる。

注釈によれば、これに類した記述は『淮南子』や『芸文類聚』に見られるという。<sup>7)</sup>紀では広く流布する「世界起源についての一般論」が冒頭に掲げられ、「故曰」以降日本固有の神話が始めるとされる。<sup>8)</sup>そのために、単純に高天原から始まる記に比して、紀では著しい粉飾が認められる。これは明らかに大陸文化の影響によるものである。宣長はこの点を捉えて次のように述べる。「<sup>コ</sup>是は<sup>カラ</sup>みな漢<sup>フミ</sup>籍<sup>コトバ</sup>どもの文を、これから取り集めて、書き加ハへられたる、撰者の<sup>ワタクシゴト</sup>私説にして、<sup>キハメ</sup>決て古への<sup>ツタヘゴト</sup>伝説には非ず。」<sup>9)</sup>と。このように宣長は、紀は「漢意の惑」や「漢

意の痼疾」に捉われて「古への伝説」を失っているのに対して、記は「いさ、かもさかしらを加へずして、古へより云と伝へたるまゝに記されたれば、その意も事も言も相称<sup>アヒカナヒ</sup>て皆上ツ代<sup>マコト</sup>の実なり」<sup>10)</sup>と評する。そして記においても「さかしら」に囚われた読み方は、極力排除されなければならないとされる。<sup>11)</sup>

いずれにしても「初発」には様々な読み方があり<sup>12)</sup>、現在でも決着をみていない。宣長読みは、識者が指摘するように、7世紀の万葉仮名に基づくので、彼の読み方が万葉時代から遡ること五百年ほど前の古代日本人の音韻にそのまま適合するかどうかは疑わしい。また宣長は、「はじめ」は「洲壤浮漂<sup>クニツチタゴヨヒテ</sup>、譬猶游魚之浮水上也<sup>ウツノミズニウカベルガゴトクナリキ</sup>」の状態だったとして、天地分離説を強力に否定するが、倉野憲司は、古代日本に中国の天地分離神話に似た考え方があったことを、そして井上光貞も、天地分離神話が東南アジアに広く分布し、日本神話もこれと関連することを指摘する。<sup>13)</sup>もしこのとおりであれば、「初発」を「はじめてひらけし」や「はじめておこりし」と読む方が字義に適っているように思われる。ただし、これらの指摘は考古学や文化人類学などの知見に基づいており、宣長のように純粋に文献学的な観点から論じたものではないので注意を要する。こうした議論を展開していけば、早晩日本民族や記の外来起源説を支持せざるを得ないであろう。宣長の狙いは真反対である。彼は記を日本固有の文献と見なすがゆえに、天地未分の状態を否定するのである。

#### 4. 「うむーなる型」の記紀神話

われわれは、「初発」の読み方に心血を注ぐあまりに事の本質を見失ってはならない。そのことをいみじくも指摘したのは丸山真勇である。彼はその注目すべき論文「歴史意識の「古層」」において「天地初発之時」の読み方よりももっと重要な点を指摘する。「初発」論争というのは、要するに、まだ神が存在しない天地未分の状態を認めるかどうかといった議論である。紀には「天先づ成<sup>あめまな</sup>

## 記紀の天地創造

りて地<sup>つち</sup>後<sup>さだま</sup>に定<sup>しかう</sup>る。然して後に、神<sup>かみ</sup>聖、その中<sup>なか</sup>に生<sup>あ</sup>れます」<sup>14)</sup>とある。これによれば、まずアメが生じ、その後ツチが生じて、神が生じたことになる。この場合アメは混沌から生じた、実にあやふやなものである。とすればこのアメと高天原を同定するのは具合が悪いので、宣長は「初発」を「ハジメニ」と訓じたのである。

では、この読み方を採用することで、天と高天原の関係はどう変化するのか。宣長の解釈は至極明快である。彼によれば、高天原は天であって、豊葦原の水穂国や中ツ国が地上の国だとすれば、天ツ神がいる天の国だとされる。<sup>15)</sup>しかしこの天の国は中国思想の天と混同されてはならない。上代人の天はアメであって、中国思想の空疎な天とは異なり真の天、実在する天である。すなわち、本来のアメは天と異なるとされる。小林秀雄も『本居宣長』においてそのことを強調する。「[天]の他に文字といふものを知らなかった上代人にしてみれば、訓とは、「天」といふ漢字の形によって、「アメ」といふ日本語を捕へ直す、その働き、まことに不安定な働きを意味したらう。従って、「アメ」即ち「天<sup>テン</sup>」といふ簡単な事にはならない。」<sup>16)</sup>と。これは卓見である。小林は、「天」の漢字よりも前に存在していた「アメ」の肉声を、現代人がいかに感じ取ることができるかが重要だとする。その方法はまさに稗田阿礼、本居宣長、折口信夫の系譜に連なる古言口承の会得である。

さて、記はこの直後にまた「高天原に成れる神の名は…」と記す。この場合の「成れる」とは、宣長流に解すれば「無<sup>な</sup>りしもの物<sup>ナ</sup>の生<sup>ナ</sup>り出<sup>ナ</sup>る」ことである。こうして独神が次々に生じ、最終的にイザナギノミコトとイザナミノミコトが誕生する。丸山の言う「持続低音」としての「古層」はこの辺りから具体的に顔を覗かせる。丸山は、「歴史の理」が神代に凝縮されているとする宣長説に従って、「歴史的出来事についての日本人の思考と記述の様式」の「基底の枠組」も神代に依拠しているという仮説を立てる。<sup>17)</sup>彼は次のように述べる。「主と

していわゆる記紀神話、とくにその冒頭の、天地開闢から三貴子誕生に至る一連の神話に、たんに上古の歴史意識の素材をもとめるにとどまらず、そこでの発想と記述様式のなかに、近代にいたる歴史意識の展開の諸相の基底に執拗に流れつづけた、思考の枠組をたずねる手掛かりを見ようというのが、本稿の出発点である<sup>18)</sup>と。このように丸山は、「天地開闢から三貴子誕生に至る一連の神話」の内に不変的な歴史意識としての「思考の枠組み」つまり「古層」を見いだす。

彼は、「天地初発」という語の特異性を認めつつも、自分の関心がこの読み方ではなく、その「実質的意味論」にあるという。<sup>19)</sup>そして「天地初発」という語が記の本文冒頭にしか見当たらないことに着目して、ここには「きまぐれ以上の根拠があり、「言意並びに朴」であった「上古の時」(序の言葉)の発想にふさわしい字句として選ばれたものとして推測される<sup>20)</sup>という。彼は、いたずらに宣長読みに与することなく、「発」をヒラク〔開〕やオコル〔起〕とも異なる「ある方向への運動性の表象」を意味するハツと読み、そうすることで「はじめ未分化であった天地が「天」と「地」との反対方向に向かって分離したという観念<sup>21)</sup>が古代日本人の内にあったとみる。そのうえで天地分離の観念は、記紀に共通する基本発想なので、宣長のように記と紀の峻別にこだわらなくてよいとする。

このように丸山は、「初発」をどう読むかといった論争を尻目に、むしろ天地が分離し始めたことに力点を置いて記紀神話を読み解く。彼によると、天地分離後は「天地、陰陽、乾坤の二元的対立の結合による万物の発生、ないし目的意識的な化育という中国的な発想<sup>22)</sup>とは異なり、「なる」と「うむ」の違いが意図的に創出されており、この点では記紀に大差はないとされる。そして丸山は、世界の創造神話の根底にあるのは「つくる」「うむ」「なる」という動詞であり、ここから宇宙創成論の三つの型が考えられるという。それらは、わ

れわれの住む世界と万物が、(イ)人格的創造者によって一定の目的でつくられたとするもの、(ロ)神々の生殖行為で生まれたとするもの、(ハ)世界に内在する神秘的な霊力の作用で具現したとするもの、である。<sup>23)</sup>このうち(イ)では「つくるもの」と「つくられるもの」とが、すなわち主体と客体とが不連続であるのに対して、(ロ)と(ハ)には血の連続性があり、「つくる」と「うむ」「なる」とが対峙するという。だがその一方で、「つくる」と「うむ」が他動詞であるのに対して、「なる」は自動詞であるので、「つくる」と「なる」が両極を構成し、「うむ」はその中間に「浮動」して、より牽引力の強い方に靡くという。こうして世界の創造神話は「つくる－うむ型」と「うむ－なる型」に分かれる。前者の典型はユダヤ＝キリスト教であり、後者の典型は日本神話である。また、古代日本では「生」「成」「変」「化」「為」「産」「実」の漢字がいずれも「なる」と訓じられたので、これらの意味をすべて包含する「なる」の「原イメージ」を古代日本人は持っていたと指摘する。加えて、誕生や所生を意味する「<sup>な</sup>生る」も「<sup>あ</sup>生る」と訓じられたので、「ある」に対して「存」「有」「現」の漢字が使用されるようになったとも指摘する。このように漢字の置き換えは意図的になされたものであり、この根底に「うむ」を「なる」の方向にひきこむ傾向<sup>24)</sup>があったとされる。

このことが何を意味しているかは明らかであろう。すなわち、日本人の思考様式においては、「つくる」に伴う主体性が喪失し、「なる」の方向に傾斜した無責任主義が支配的になったということである。丸山は、こうした傾向が記紀神話の「はじめ」に現れているだけでなく、昔から今日まで日本人の歴史意識を形成してきたとみる。

## 5. おわりに

丸山は、日本の神道について「絶対者がなく独自の仕方世界を論理的規範

的に整序する、「道」が形成されなかった<sup>25)</sup>という。この指摘はそのまま「うむ一なる型」思考としても当てはまる。この点についてもう少し掘り下げてみよう。聖書では合目的に天地創造がなされ、神の活動の内にはっきりとした「整序」が認められる。これに対して、記紀神話では神々がA→B→…Gといった具合に合目的に推移しておらず、偶然に生成している。最初にアメノミナカヌシ、タカミムスヒ、カミムスヒの三神が誕生するが、彼らは何もせずに「身を隠したまひき」とある。これらの神々と次に現れるウマシアシカビヒコヂの神、アメノトコタチの神との関係はどうか。アメノミナカヌシは高天原の中心神であり、他の二神は「万物の生産・生成」<sup>26)</sup>を意味する。このことから、生命力が周囲に漲り、やがて同じく成長力や生命力を象徴するウマシアシカビヒコヂが現れたと解釈することもできる。それにしても何ゆえにアシカビなのか。アシカビは「葦牙」と書くが、古代日本人はこれを生命力や成長力の源と解して神に見立てた。アメノトコタチの後に現れる神は、クニトコタチの神、トヨクモノの神、ツノグイの神、ウヒヂニの神、妹スヒヂニの神、ツノグヒの神、妹イクギイの神、オホトノヂの神、妹オオトノベの神、オモダル神、妹アカシコネの神であるが、これらの多くは泥、土、砂、地面などを象徴し、まだ神々しい体裁をなさない。これらの神々は「三・五・七」を尊ぶ中国思想の影響によるとする見解もあるが、よくは分からない。<sup>27)</sup>いづれにしても実質的な神々の出現は、イザナギの神とイザナミの神を俟たなければならない。

彼ら以前の神々は、意図的に「つくられた」のでも「うみだされた」のでもなく、「なった」というべきであろう。聖書にある「われわれ」<sup>28)</sup>としての創造主体が記紀では不明確である。しかしイザナギとイザナミの出現を機に「うむ」行為が開始される。だがここで注意しなければならないことは、イザナギとイザナミの「うむ」行為にしても、彼らの意志ではないということである。記には「ここに天つ神 あま 諸 もろもろ の命 みこと もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、

## 記紀の天地創造

「この漂へる国を修め<sup>つゝ</sup>理り固め成せ」<sup>29)</sup>とある。このように二神は高天原の神々に託されて国生みを開始する。それゆえ二神は絶対者ではなく、よく言われるように「祀られるとともに自らも祀る神」<sup>30)</sup>の原形である。そして面白いことに彼らの国生みは失敗しつつも成就する。この点は聖書で神が天地創造に際し「良しとされた」のとは著しい相違である。とはいえ聖書にも失敗は含まれる。その典型例がノアの箱舟譚である。聖書には「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔いる」(創6:5-7)とある。作者が神の後悔を予想していたかどうかは定かではない。しかし完全なはずの神の失敗が神学に難問を突きつけたことは間違いない。

そのことはともかく、それでは失敗とは何であろうか。失敗はある種の意志や志を前提にしないかぎり起こりえない。すなわち、失敗は「つくる」や「うむ」といった他動詞において発生し、「なる」のような自動詞にはありえない。丸山が指摘したように<sup>31)</sup>、「うむ」が「つくる」側にではなく「なる」側に傾斜すれば「うむ-なる型」の神話が形成される。記紀神話はこのカテゴリーに含まれるので、失敗が責任に転嫁することはありえない。そのような都合主義が戦前の日本に大ききたちはだかったことは指摘するまでもない。だがそれよりもっと重要なのは、そのような不気味に忍び寄る影にわれわれもまた気づいていないことである。

註

- 1) 倉野憲司校注『古事記』岩波書店 1990年 214頁。なお、当該個所を倉野訳は「天地の初めて発<sup>あめつち</sup>けし時、高天原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高野産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。」としている(同書 18頁)。
- 2) 藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社 1988年 874頁参照。
- 3) 本居宣長『古事記伝(一)』岩波書店 1940年 169頁参照。
- 4) 同書 29頁。
- 5) 同書 31頁。
- 6) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀(一)』岩波書店 1994年 15頁。なお、原文は次のとおり。「古天地未<sub>レ</sub>剖、陰陽不<sub>レ</sub>分、渾沌如<sub>二</sub>鷄子<sub>一</sub>、溟滓而含<sub>レ</sub>牙。及<sub>二</sub>其清陽者、薄靡而爲<sub>レ</sub>天、重濁者、淹滯而爲<sub>レ</sub>地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難。故天先成而地後定。然後、神聖生<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>焉。」(423頁)
- 7) 同書「補注(巻第一)」309頁参照。
- 8) 同書「注八」17頁参照。
- 9) 『古事記伝(一)』29頁。
- 10) 同書 26頁。
- 11) ちなみに武田訳も宣長説の呪縛下にある。彼も当該個所に「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、…」という訳を当てている。
- 12) 例えば、新潮社版(二宮一民校注 日本古典集成)では「発」を「おこる」と訓じて、岩波版との相違を際立たせている。また小学館版(山口佳紀校注 新編日本古典文学全集)は、宣長にならって「初発」を「はじめて」と訓じ、「発」を「ひらく」や「おこる」とするのは不適切だとしている。
- 13) 井上光貞『日本の歴史(一)』中央公論社 1973年 22頁参照。
- 14) 『日本書紀(一)』神代上 16頁。
- 15) 『古事記伝(一)』170頁。
- 16) 小林秀雄『新訂小林秀雄全集』(第13巻)新潮社 1980年 276頁。
- 17) 丸山真男『歴史意識の「古層」』(『忠誠と反逆』筑摩書房1998年 所収)355頁参照。
- 18) 同書 355-356頁。
- 19) 同書 391頁。
- 20) 同書 390-391頁。
- 21) 同書 393頁。
- 22) 同書 367頁。
- 23) 同書 360頁。
- 24) 同書 361頁。
- 25) 丸山真男『日本の思想』岩波書店 1961年 21頁。
- 26) 次田真幸注『古事記(上)』講談社 1977年 38頁。

## 記紀の天地創造

- 27) 同書39頁参照。
- 28) 例えばそれは「われわれのかたちに、われわれをかたどって人を造り、…」と神が語る場合である。一神教の神がなにゆえに「われわれ」と語るのかは創世記の謎の一つである。
- 29) 倉野校注『古事記』19頁。
- 30) 『日本倫理思想史』（『和辻哲郎全集(第十二巻)』岩波書店 1962年所収)56頁。
- 31) 丸山真男「歴史意識の「古層」」360-361頁参照。

**The Creation Myth in *Kojiki* and *Nihonshoki* :**  
about the reading of “天地初発之時”

Fumio MATSUI

Professor, Hiroshima University

*Kojiki* begins with the phrase ‘天地初発之時’. There has been controversy about how to read it since the Edo period, but it remains unsolved. The aim of this paper is to focus on this problem and explain its significance as compared with the Bible. As is well known, the Bible begins with the following sentence: “In the beginning God created the heavens and the earth.” It is obvious that God in the Bible existed earlier than the heaven and the earth because He is an absolute creator of all things in the universe. However, gods in Japanese mythology must have come into existence after heaven at least, if we interpret the phrase ‘天地初発之時’ to mean “when in the beginning the heaven is separated from the earth”. Norinaga Motoori excluded the influence of Chinese culture and interpreted this phrase as “when the heaven and the earth begin”. Masao Maruyama discovered the spirit of ancient Japanese by giving the reading of ‘hatsu’ to the word ‘発’, which expresses movement in a given direction. As a result, it became possible for gods to be generated one after another. Therefore Japanese mythology belongs to the ‘Generate-Grow’ type rather than the ‘Create-Generate’ type of mythology. The former is to be acknowledged not only in the mythological world, but also in the historical consciousness of the Japanese from ancient times to modern times.